

經濟と政治との関連の問題（十二）

——いわゆる「トロツキズム」の性格規定——

山 本 二 三 丸

三十一

トロツキーの労作『結果と展望』は、短い「まえがき」とそれほど長くない九つの節からできているが、これら九つの節は、つぎにみられるようにきわめて特異な表題をつけられている。

一、ロシアの歴史的発展の諸特性

二、都市と資本

三、一七八九年—一八四八年—一九〇五年

四、革命とプロレタリアート

五、権力を握ったプロレタリアートと農民

六、プロレタリア体制

七、社会主義の先決要件

八、ロシアにおける労働者政府と社会主義

九、ヨーロッパと革命

經濟と政治との関連の問題（十二）

われわれは、本文の考察にはいるにさきだって、そのまえにおかれた「まえがき」を見てみることにしたい。これは、一九一九年の再版への序文とちがい、一九〇六年本文が書かれたのと同じ時に書かれたもので、あとから「適当な」加筆が施されたこともおそらくないものとおもわれる。この「まえがき」は、主題についての著者の基本的な考え方と、総じて問題考察のさいの著者の姿勢を示しているとみられるので、まずその全文をにかけて、簡単な検討をしておこう(本書の邦訳は、きわめて不適当な、ときとして誤訳とおもわれる訳がすくなく見いだされるので、その参照はとりやめ、英訳書からわたしが直接訳出したものによることとした)。

「ロシアにおける革命は、社会民主主義者をのぞくすべての人々にとって、まったく思いがけずに生じた。マルクス主義はずっと以前に、ロシア革命の不可避なことを予言した。その革命は、資本主義的發展と骨化した絶対主義の諸勢力とのあいだの衝突の結果として、かならず勃発せざるをえなかった。マルクス主義は、きたるべき革命の社会的性格をあらかじめ評価した。それをブルジョア革命と呼ぶことによって、マルクス主義は、革命の直接の客観的課題が全体としてのブルジョア社会の發展のための正常な諸条件を創りだすことにある、ということを示した。

マルクス主義が正しかったことは明らかとなった。そして、このことはこんにち議論または証明の必要を越えている。マルクス主義者たちは、現在、まったく別の課題に直面している。それはすなわち、その内的メカニズムの分析によって、發展しつつある革命の「可能性」を発見することである。われわれの革命を一七八九—一七九三年、または一八四八年の諸事件と単純に同一視することは、馬鹿げた誤りであろう。それによって自由主義が生活した養われているところの歴史的類推は、社会的分析にとって代わることはできない。

ロシア革命はまったく独特の性格をもっている。それは、わが国の全社会的、歴史的發展の独特の傾向の結果であり、そして、それはそれで、まったく新たな歴史的展望をわれわれのまえにひらいているものである」(ibid. P. 36: 傍点—トロッキー)。

ここに述べられている「まえがき」が、どの程度に「マルクス主義的」なものかということと、とりあえず簡単に点検してみよう。

まず、冒頭の文章——「ロシアにおける革命は、社会民主主義者をのぞくすべ、の、人々にとつて、まったく思いがけずに生じた」(傍点—山本)——は、事実と反する、まったく内容からつぽの作文である。一九〇五年一月一日旅順の降伏をきいて、レーニンは、ただちに『旅順の陥落』と題する論文を発表しているが、そのなかで、「支配者、命令者たるロシアの破局が、ヨーロッパのブルジョアジー全体に「恐ろしいこと」とおもわれるのも、ふしぎなことではない」と述べ、つぎのように説明している。

「この破局は、全世界の資本主義的發展が異常に促進されること、歴史が促進されることを意味するが、ブルジョアジーは、このような促進がプロレタリアートの社会革命を促進するものであることを、ひじょうによく、あまりにもよく知っており、苦い経験によって知っているからである」(全集第四版、第八卷、三二ページ、傍点—山本)。

ここに述べられているのはロシアのブルジョアジーのことではないという、バラライキンことトロツキーの反駁も十分予想されるので、なおもうひとつの引用を、同じレーニンの論文から——少々長いが——引いてみよう。

「ドイツ・ブルジョアジーのこうした冷静な機関紙の一つ『フォシシェ・ツァイトウング』、一九〇五年一月六日」は、つぎのように書いている。「ロシアに革命が爆発するなどということはまったくありえない事がらだ、という意見が、かたく根をおろしていた。人々はこの意見をありとあらゆる論拠で擁護している。……不平分子のなかの極端な分子はひとにぎりの人間にすぎず、盲動(小さな燃えあがり)とテロリスト的な暗殺を組織することはできても、全般的な蜂起を呼びおこすことはけつしてできないと人々は言う……」。しかし——と、この新聞はつづけて言う——、いまでは、いくたの兆候が一大変化を証拠だてている。ロシアの革命について語っているのは、もはや革命家ばかりではなくトルベツコイ公爵のような——内務大臣あての彼の手紙は、いま外国のあらゆる新聞に転載されている、——

—「熱中」などとはまったく縁のない、秩序の堅実な支柱でさえも、それを語っている。「ロシアで革命が懸念されているのには、あきらかに事実的な根拠がある。なるほど、ロシアの農民が熊手を手にとって憲法をたたかいとりにかけるなどということは、だれも考えていない。しかし、革命はたして農村でおこるのだろうか？ 現代史における革命運動の担い手には、ずっとまえから大都市がなっている。ところが、ロシアでは、南から北まで、東から西まで、ほかならぬ都市に動揺がおこっている。この結末がどうなるかについては、だれも予言しようとするものはないが、しかし、ロシアでは革命はありえないと考えている人々の数が日一日と減少しつつあることは、疑いない事実である。そして、もし重大な革命的爆発があとにつづいてやってくるなら、極東の戦争でよめられた専制がそれを制御できるかどうかは、まったく疑わしい。」

そうだ。専制はよめられた。いちばん信じようとしないう人々までが、革命がおこることを信じはじめている。人々が全般的に革命を信じることは、すでに革命の始まりである」(前出、三八—三九ページ)。

穩健自由主義者のイエ・エヌ・トルベツコイ公爵さえ、革命を予想し、「ロシアで革命はありえないと考える人々の数が日一日と減っている」という事実がドイツ・ブルジョアジの機関紙に公表されているのに、わが「社会民主主義者」は、その名誉にかけて、「社会民主主義者をのぞくすべての人々にとって、まったく思いがけずに革命は勃発した」と書いている。おまけに、この「社会民主主義者・マルクス主義者」は、右のドイツ・ブルジョアジの機関紙がたった一つだけ、安心感と満足感をもって書きたてている「事実」、つまり、「ロシアの農民が熊手を手にとって憲法をたたかいとりにかけるなどということは、だれも考えていない」ということを、動かしがたい事実だとし、最後まで信じこみ、革命における農民の重大な役割などはまったく認めようとしなかったものであって、この点で

はトルベツコイ公爵らの自由主義的ブルジョアジーとまったく同じ見地をまもりつづけているといわなければならない。なぜならば、ロシアの農民は、一九〇五—一九〇七年の革命を通して、「熊手を手にとって憲法をたたかいてにでかける」といった手ぬるいやり方ではなく、「武器を手にし、地主の邸をおそって焼払い地方長官と地主を血祭りにあげて土地を没収する」という、文字どおりの農民蜂起をはげしく展開したのであって、このようなまぎれもない事実が、不思議にもわが「マルクス主義者」の視野からすっかり脱け落ちてしまっているからである。

こうしてみると、「まえがき」の最初の文章は、一見「マルクス主義的」調子をもっているようであるが、実は、トルベツコイ公爵よりもずっと右寄りの自由主義的ブルジョアジーにもっともふさわしい見地を示しているものということになる。

では、つぎの「マルクス主義は、ずっと以前にロシア革命の不可避免ことを予言した」という文章はどうか？ これは、予言があたったかあたらなかったかということがいちばんの問題であるとする見方を示しているのであって、そもそも予言の適中、不適中を問題にすること自体、真のマルクス主義と無縁である。マルクス主義者は、革命の予言などしたためしはなく、また予言に重きをおくものでもない。さきに本論稿の（五）においてみたように、「労働解放団」の『綱領草案』も、ロシア社会民主労働党の『綱領草案』も、いずれも、産業プロレタリアートが第一にたてなければならぬ目標として「共産主義革命」と「労働者階級による政治権力の奪取」を指示し、「革命的労働者党の結成」の必要を強調し、とくにこの党の「第一の政治的任務」として「絶対主義の打倒」を明確にうちだしている（本誌第二十五卷第四号、一〇—一一ページ、参照）。ところが、これにたして、ロシアの社会民主主義者のあいだから、「絶対主義の打倒と政治的自由の獲得」という政治闘争はうしろにひっこめて、もっぱら経済闘争と合法的な反政府闘争を重点的

に遂行すべきだと主張する經濟主義的潮流があらわれ、この潮流が党内外で強固な日和見主義的分派を形づくり、革命的マルクス主義の立場にたつレーニン派にたいして陰險・執拗な策動、妨害および非難・攻撃を加え、「意識的な革命運動」をおとなしい「反政府闘争」におきかえることを主張しつづけた。この人々が、「ロシア革命の不可避免ことの予言」をするはずはなく、むしろ自由主義的ブルジョアジーのほうが「革命の危機」をはやくから感知していたのである。こうした日和見主義的「反政府闘争」の先達がほかならぬわがバラライキンのもっとも親密な戦友たちであることは、さきに詳しく考察したとおりである。また、歴史的事実についてみても、すでに十九世紀末から産業恐慌勃発にともなう失業増大・賃銀引下げに抵抗する労働者の広範な經濟闘争は、政治闘争に發展し、經濟的ストライキは政治的ストライキからさらに發展して街頭デモンストレーションになり、民主的自由の政治的要求をかかげ、「ツァーリ専制打倒」のスローガンをかかげて進出する労働者にたいして軍隊と警察がおそいかかるという、まさに文字どおりの革命的內乱を現出するにいたったものである。この労働者の革命闘争の展開につれて、農民が同じように革命闘争を展開していったことも、さきにふれたとおりである。こうした情勢に直面してロシア社会民主労働党のうちのレーニンによって率いられる革命的翼は、労働者の政治闘争を積極的に支持し、またこれを正しく指導するために奮闘したのであって、「その当面の任務は、大衆のあいだに煽動を十倍にし、政府のありとあらゆる動揺を利用し、蜂起の思想を宣伝し、蜂起の必要を説明しつつ、自己の組織を拡大する」ことだとされた。これにたいし、当面のロシア革命は多分ブルジョア革命であるはずだという予言に満足していた党内の日和見主義的翼は、革命のブルジョア的性格ということだけから、主役はブルジョアジーで、プロレタリアートは「革命的反政府派」としてとどまるべきだという主張を執拗にくりかえしていたのであって、これもすでに検討ずみのことである。これによって、トロ

ツキーが「マルクス主義は、予言した」と言うときの「マルクス主義」が、客観的にみて、ロシア社会民主労働党内の革命的翼を指しているか、それともその日和見主義的翼を指しているかということは、これまで本論稿で両派の闘争のいきさつをあとづけてきたわれわれには、容易に推察できるのである。

ところで、問題は、そのあとに述べられている「ロシア革命の評価」の仕方そのもののうちにある。トロツキーはまず、ロシア革命は、「資本主義的發展と骨化した絶対主義の諸勢力とのあいだの衝突の一結果として」必然的に勃発した、と書いている。後者の「骨化した絶対主義の諸勢力」という言葉は、言葉そのものとしては簡単だが、その内容を規定しないでは、ただの空文句に終るおそれがある。ところが、われわれの予想どおり、この「諸勢力」の意味は最後まで説明されずじまいになっているのである。そこで、やむをえず、ひとまず、これは、つぎの「一」に出てくる「専制政府」を指しているものと考えられない。ところで、一方が「諸勢力」であるからには、他方もこれに敵対する「諸勢力」でなければ、「衝突」のしようはなく、「革命」の必要もなくなる。では、他方の「資本主義的發展」とは、いったい、どんな「諸勢力」を意味するものか？ といえば——これまたつぎの「一」のなかで示されているところであるが——、なんと、これは、資本主義的な「経済的および文化的發展」のことなのである。それゆえ、ロシア革命がなぜ必然的に勃発しなければならなかったかという、その理由は、専制政府がいて、資本主義的な「経済的および文化的發展」の邪魔をしているからだ、というわけである。「経済的および文化的發展」を阻む「骨化した専制政府」をとりのぞくこと——これがロシア革命の仕事だ、とトロツキーは言うのである。なるほど、これは、「きたるべき革命」についてのみごとな「社会的分析」ではある。それは、社会学的な、あるいは社会文化史学的——こんな言葉があるとすれば——分析のけっこうな見本であるかもしれないが、だんじて、マルクス主義的

な分析ではない。「経済的・文化的發展」を阻止している「専制政府」を倒せというのでは、いったい、どの階級とどの階級とが衝突するのか、どこに革命という血なまぐさい階級闘争が生まれるかは、まったくあいまいにされてしまふ。これでは、階級闘争抜き「革命」ということになりかねない。苛烈な階級闘争抜きの「革命」、つまり言葉はなるほど革命だが、括弧つきの革命、本質は改革という「革命」も、歴史上および理論上はりっぱに成り立つのである、これにむかつて意識的に努力し、奮闘した——まさに「革命的闘争」！——人々も数えきれないほど実在する。ロシア革命に当面したロシアでも、本物の革命ではなく、こうした括弧つきの「革命」闘争にしてしまおうとあれこれ骨を折ったものはおびただしが、これを簡単にまとめていえば、自由主義的ブルジョアジーと日和見主義的社会主义主義者(いいかえれば、メンシェヴィキ・新イスクラ派)との二つであるということが出来る。

それゆえ、ここでトロツキーが、「きたるべき革命の社会的性格をあらかじめ評価し」て、その「革命の直接の客観的課題」が、「資本主義的な経済的・文化的發展を阻止している専制政府を打倒すること」によって「全体としてのブルジョア社会の發展のための正常な諸条件を創り出すこと」にあるという理由で、この革命を「ブルジョア革命」⁽¹⁴⁶⁾と呼んだのが、マルクス主義者だと述べているのは、実は、革命的マルクス主義者・ポリシェヴィキのことを指して言っているのではけつてなく、客観的には、まさしく括弧つきの「マルクス主義者」、つまりロシア社会民主労働党内の日和見主義的翼であるメンシェヴィキとこれに同調する連中のことを言っているのである。これはまた、当時マルトフのもっとも親密な戦友であったトロツキー自身の親メンシェヴィキ的見地を、なんと適切に自己暴露していることであらうか！

(146) これにたいして、真のマルクス主義者、つまり、革命的翼・ポリシェヴィキがロシア革命のブルジョア的性格をどのよう

にとらえ、これにたいしてどのような実践的課題を提起したかは、さきに検討した『民主主義革命における社会民主党の二つの戦術』のなかで、詳細にみたところであるが、行論でも、必要に応じてまたその要点をかえりみることにしよう。

以上によって、「マルクス主義が正しかったことは明らかにした。そして、このことは、今日議論または証明の必要を越えている」というトロツキーの説明が、きわめて不当なものであること、そして、その当時彼が一貫して追隨していた日和見主義的「メンシェヴィキの見地をうまくごまかし、自分がそのときからずっと革命的マルクス主義者」ポリシェヴィキの見地に立っていたものだとの見せかけをさりげなくつくりあげてしまおうとしている意味で、きわめて陰險なつくりごとをならべたものであることは、うたがう余地なく明白である。

ところで、トロツキーは、ここで簡単に論点を別のところにうつして、「マルクス主義者」として、こう説いている、——「マルクス主義者たちは、現在、まったく別の種類の課題に直面している。それは、すなわち、その内的メカニズムの分析によって、発展しつつある革命の「可能性」を発見することである。」この叙述を、その文字どおりにうけとるならば、それは、トロツキーがつぎのような考え方をもっていることを示しているといわなければならない。

第一には、現在と現在以前のあいだにおいて、情勢についてのなんらかの進展もしくは重大な変化が生じたために、以前の課題にかわって、別の課題が「マルクス主義者」にたいして提起されるようになったということ。

第二には、現在からあとの課題は、「革命の内的メカニズムの分析によって、発展しつつある革命の「可能性」を発見することになったということ。

第三には、現在以前の「課題」は、「全体としてのブルジョア社会の発展のための正常な諸条件を創り出すこと」にあったということ。

このように、トロツキーの氣どった文章をこくふつうの筋のとおった文章に書きかえてみると、彼の主張の内容がどんなにひどいものであるかということが、すぐさまわかるのである。トロツキーと同じように無内容の、わけのわからない空文句や銜学的な単語をならべたてて純真な勤労青年をひっぱりまわそうという、煽動政治屋の亜流がこの国では「勢力範囲」の争奪に熱をあげているという「情勢」もみられるので、右の三点について、少々吟味をくわえておくことにしよう。

まず、第三からみていこう。トロツキーは、「現在、まったく別の種類の課題に直面している」と書いているので、当然、それに先きだつ説明のなかで、課題が、つまり正確にいえば「現在より以前における課題」が、述べられているはずである。そしてまた、まえにはっきり述べられているのでなければ、右の文章は、およそ意味をなさないものとなってしまう。ところでそれよりまえの説明のなかで示されているのは、たったひとつ、「革命の直接の客観的課題が全体としてのブルジョア社会の発展のための正常な諸条件を創りだすことにある」という箇所だけである。これ以外には、どこを探しても、なにひとつそれらしいものは見つからない。だが、同じ課題という言葉ではあるが、こちらのほうは、革命の課題である。ところが、現在において問題とされているのは、「マルクス主義者」にとつての課題である。一方は「革命」の課題であり、他方は「マルクス主義者」の課題である。ごらんのように、これほどひどい意識的、たまたま、あるいはすりかえは、ほかにそうさらにあるものではない。こういうごたまぜやすりかえが平気でできるという人間は、たんに論理的思考が欠けているだけではない。もっとはるかに悪質なものの、つまり、どんな詭弁でも弄して自説をおしつけようという、煽動政治屋につきものの性癖が、その身体にしみついているものである。だが、ことは、たんにごたまぜやすりかえを指摘するだけでは片づかない。

そこで、問題は第一の「情勢の変化」にうつる。「全体としてのブルジョア社会の発展のための正常な諸条件を創りだす」という課題が、現在よりまえに提起されていたのにたいして、現在は「まったく別の種類の課題」が提起されることになったということは、客観的な情勢に重大な変化がその間に生じたということを意味している。客観的情勢に重大な変化がなければ、「直接の課題」——それが、「ロシア革命」にとつての課題であれ、「マルクス主義者」にとつての課題であれ、このばあいは同じことである——が、その前後で「別の種類のもの」に変わることは、絶対にありえない。ところで、客観的情勢の重大な変化も、二通りの場合が——ただし、この二つだけが——ある。そのひとつは、それより以前に提起されていた課題が首尾よく遂行され解決されることができて、その点で情勢が大いに進展することになったという場合であり、もうひとつは、以前の課題は解決されないまま、客観的情勢に重大な変化が、つまり、課題がどうしても根本的に変わらざるをえないほどの大きな変化が、その間に生じたという場合である。では、第一の場合が現実にもうまれたか、いいかえれば、「全体としてのブルジョア社会の発展のための正常な諸条件を創りだす」という革命の課題は、首尾よくなしとげられ、「ブルジョア社会の発展」が保証されるようになったか？ 問題を出しただけで、答えはすぐさま返ってくる。「革命の直接の客観的課題」が首尾よくなしとげられるなどということは、これっぽっちもなかった。この文章をトロツキーが書いているのは、一九〇六年であると自分で述べているところからみて、「現在」ということは、一九〇六年ということになるであろう。ロシア第一次革命は、一九〇五年一月に勃発し、同じ年の十二月に最高頂に達し、それから徐々に下向線を辿って一九〇七年まで継続・展開されたものであるが、その間に「革命の課題」が首尾よくなしとげられたということは、残念ながらすこしもなかった。一九〇七年に一応それが終熄をみたときは、むしろ革命の、一時的敗北という言葉がぴったりするような情勢であつたのである。このよ

うに、一九〇五初めから一九〇七年までロシア第一次革命が展開されたということは、第二の場合、つまり、客観的情勢が一九〇六年を境にして——もっとも、それが一九〇六年であらうと、ほかの年であらうと、同じことであるが——重大な変化をきたしたというようなことが、全然なかつたということを明白に裏書きしているものである。このようにして、現在よりまえに提起されていた革命の課題——「全体としてのブルジョア社会の発展のための正常な諸条件を創りだすこと」⁽¹⁴⁶⁾——が「現在」までに解決されたとか、「別の種類の課題」によってとって代わられたとかいうことは、事実まかつたくなかつたものであり、したがって、それが解決されたとか変わったとか——説明ぬきで——いとも簡単に書きたてていること自体、おどろくべき意図的、こじつけと術学的はったりをあらわしているものだということが、よくわかるのである。

(146) レーニンの『二つの戦術』について、その要点を知っていられる読者にはすでにおわかりのこととおもわれるが、この「ブルジョア革命の直接の客観的課題」について、わがバラライキンは、ほんのちょっとした小細工を加えている。それは、「ブルジョア社会の発展のための」というときの、社会という文字のつかいかたである。ここは本来、「ブルジョアの生産の発展のための」か、——もっと適切な表現をつかえば——「資本主義の発展のための」とあるべきところである。トロツキーは、「全体としての」などという空文句をつけて体裁を装っているが、「ブルジョア社会の発展のための正常な諸条件」などというものは、言葉の上でこそ一応は成り立つが、じつさいにはけつしてあるものではない。そもそも、ロシアは「ブルジョア社会」などではない。「ブルジョア社会」でないからこそ、ブルジョア革命が、つまり、資本主義の発展を保証する諸条件をつくりだすための革命が、もっと正確にいうならば、「旧時代の残存物、農奴制の残存物——その最大のものは専制である——をもっとも決定的に一掃するような、それによって、資本主義のもっとも広範な、自由な、急速な発展をもっとも完全に保障するような」革命が、なければならぬのである。トロツキーは、その前文では、さきにみたように、「資本主義の発展」と「骨化した絶対主義の諸勢力とのあいだの衝突」の一結果としてのブルジョア革命が必然であったという、見当はずれの空文句を並べていたのであるが、ここに来て、その「資本主義の発展」という空文句はたちまちどこかへ捨ててしまい、か

わって「ブルジョア社会の発展」という、迷文句をさも意味ありげにつかいだしているのである。つまり、これによって明瞭に示されているのは、わがバラライキンが、「資本主義の発展と骨化した絶対主義の諸勢力のあいだの衝突の一結果」という文句も、「全体としてのブルジョア社会の発展のための正常な諸条件」という文句も、そのどちらもどういう意味のものだかわからず、レーニンの論文をかじり読みしてうろ覚えに頭の中に残っている「理論的」用語をあれこれ並べたただけのものだということ、つまり、相も変わらぬ空文句の達人でしかない、という事実である。

では、第二はどうか？ これもまた、右にみた第三にまさるともおとらない空文句の羅列である。いったい「革命の内的メカニズム」とはなにか？ そもそも、革命そのものになんらかの「内的メカニズム」がある、などと言うことが、底知れないたわごとである。革命は、敵対する諸階級のあいだの苛烈なたたかいであって、諸階級のあいだの相互の力関係、それらの動向によって、その展開が規定される。「革命そのものが内的メカニズムをもっている」などという文句以上に銜学的なたわごとは、そうざらにあるものではない。だが、ひと皮剝げば、この世紀的空文句は、トロツキー自身の革命についての、まったく観念論的な俗物的とらえ方を端的に示している。そのとらえ方とは、つぎのようなものである。すなわち、革命を真に主体的に遂行するとか、革命に党の戦略にそった性格をあたえるとかいうことは全然考えず、ただ客観的に——つまり傍観者のに——革命を評価し、その展望を出してみせることを主眼においているもので、そのためには、諸階級勢力の正確・綿密な分析などする必要はまったくなく、もっと手とりばやく、簡単に、「革命」そのものについて、それがどういう「内的メカニズム」をもっているか、その「内的メカニズム」がどう働いて、どちらの方向に自動的に——つまり階級諸勢力の闘争、力関係などにはおかまいなしにひとりで——動いていくか、ということをも「分析」するほうがずっとよい、というのである。それゆえ、わがバラライキンが、革命の『結果と展望』という画期的な表題の労作をつくりあげるさいには、もちろん、階級諸勢力の精確な分

析などには、まったく頭をつかう必要はさらさらなく、もっぱらいろいろの革命のパターンを、いいかげんにつかんでおいて、こちらの革命のパターンでいくか、あちらの革命のパターンでいくか、こちらの革命のパターンのばあい「内的メカニズム」(?)はどうか、あちらのばあいはどうか、といったことを多少あげつらえば、もうそれで、「革命の内的メカニズムの分析」は出来あがり、ということになるのであって、こうした安直な、まさに空文句の達人・煽動政治屋にふさわしい考え方と手法が、本論で「はなばなしく」(?)展開されているという次第なのである。こういう革命のパターンを並べてみせるという、まったく「予想屋」もしくは八卦見にびったりの手法のつかい手が、革命を主体的にたたかい抜くとか革命に一定の方向を与えるために死力をつくすなどというような「よけいな」ことはいっさい考えず、もっぱら予想に力点をおいて、「發展しつつある革命の『可能性』を発見すること」をひたすら考え、これこそ「マルクス主義者」の「直面している課題」だ、と力説しているのは、バラライキンの立場においては、まことに首尾一貫したものがあるといわなければならないまい。これこそ、まさに括弧つきの「マルクス主義者」、つまり自由主義的ブルジョアジーの後尾にくつつく日和見主義的俗物にもっともふさわしい「課題」ではある。

それゆえ、これにつづいて、トロツキーが、「われわれの革命を一七八九——一七九三年、または一八四八年の革命と単純に同一視することは馬鹿げた誤りである。歴史的類推は、社会的分析にとって代わることはできない」と、得意の調子で「理論的」文章を並べたてているのも、きわめて自然であって、その内容はいちいちもつともなことばかりなのである。つまり、一七八九年革命や一八四八年革命は、それぞれ「革命のパターン」がちがっているから、すぐ簡単に——「単純に」(！)——同じものとするのはまちがいだ、よくパターンを比較して、どこが類似していてどこがちがっているかを見わけることが肝腎だ、というわけである。だから、「単純に同一視する」——これが「歴史的類推」とい

うやつである！——のはだめで、ちゃんと革命の相互比較、「革命の内的メカニズムの分析」——これが、なんと「社会的分析」である！——をやらなければならぬと、くりかえし力説し、「歴史的類推」などにたよってそれで「生活し養われている」（!!）自由主義がなくてもなく一蹴されてしまう羽目に立ちいたるのも、しごく当然のこととされるのである。しかし、念のため、客観的事実についてみるならば、革命のパターンを注意深く研究し、「発展しつつある革命の「可能性」を発見すること」にけんめいにとりくみ、この「可能性」をなんとかして自分たち自身の階級的利益を確保する方向へむけて動かそうと工作をしたもの、そして一八四八年にすでにこの工作にまふと成功し、さらにロシア革命でも同じ目的のためにその工作に奮闘したものが、ほかならぬ自由主義的ブルジョアジーであることがあきらかとなる。それゆえ、トロツキーは、「自由主義が、それによって生活しまた養われている」などと見下げて書いているが、八卦見の予想、つまり文字どおりの「歴史的類推」のひねくりまわしにひたすら終始して空論を並べたことに頭をつかい、自由主義的ブルジョアジーのように「階級的」立場にしっかり立って「主体的に」革命に取りくむという実際活動をしない「分析」屋は、誰あろう、実は、メンシェヴィキ・新イスクラ派の面々とわがバラライキンだけだということになるのである。こうして、自分を飾り立てるために並べた術学的文字が、客観的にはおのれの額を打つものとなっているのである。

以上によって、労作『結果と展望』は、なによりもまず「革命の内的メカニズムの分析」により「発展しつつある革命の「可能性」を発見する」ことを唯一の課題とするものであって、この画期的な「分析」「社会的分析」を読者に教示せんがために著わされたものだ、ということが明らかになった。ところで、一七八九年革命や一八四八年革命などと革命のパターンを見くらべてロシア第一次革命を「単純に」同一視するようなことが誤りであることはいうまでもなく、

この誤りをおかさないようにするためには、まずもってロシア革命についてその独特の性格というものをよくとらえておき、これを他の諸革命との比較の決定的な材料にすることが必要である。ロシア革命の独特の性格はまた、当然にロシア社会の全社会的・歴史的發展の独特の傾向の結果にほかならない。したがって、このロシア社会の全社会的・歴史的發展の独特の傾向をまずしっかりと把握することから、「社会的分析」ははじめられなければならない、という次第で、本論では、まず「ロシアの歴史的發展の諸特性」の「分析」から、トロツキーの得意の「社会的分析」が展開されるということになるのである。

このようにして、右の「まえがき」を通読しただけで、われわれは、確實につきのことを知ることができる。それは、すなわち、トロツキーがマルクス主義とかマルクス主義者と言っているのは、けっして真のマルクス主義者・ボリシェヴィキのことではなく、むしろ、これに反対する「マルクス主義者」つまり、これまで詳細にみてきたように、レーニンによって完膚なきまでに批判・暴露され、粉碎された日和見主義的翼・メンシェヴィキとその同調者を指しているものだということ、したがって、革命の評価、階級諸勢力の分析、社会的・歴史的發展の分析などは、いずれも反マルクス主義的な、むしろ自由主義的ブルジョアジーの立場にもっとも近いものでなければならぬ、ということである。そのほか、ふつうのごくありふれた基本的概念、たとえば、「資本主義の發展」とか、「革命の課題」とか、「社会的分析」とか、等々について、かならず度はずれた曲解と濫用を平気でやってのけ、しかもその曲解と濫用の裏には自由主義的ブルジョアジーもしくはメンシェヴィキ・新イスクラ派の立場と考え方が強固につらぬかれてあるということなど、例によって注目すべき特徴が多々見いだされるが、ここでは以上のことを確認するだけにとどめておこう。

以上のことを念頭において、われわれは、本論の「一」から順次にその内容を——なるべく簡潔に——検討してゆき、それによってこの著作とこれをあらわした著者との「独特の特性と傾向」とについて、的確な観念をつかむことにしよう。

三十二

まず、「一 ロシアの歴史的発展の諸特性」について。ここでトロツキーがなにを言おうとしているかを読者にあやまりなくとらえてもらうために、この「一」を構成している比較的短い総計二十八のバラグラフの各々から、それぞれ適当とおもわれる若干の文章を抜粋して、はじめから順次にかけてみることにしよう（頭につけた番号は、行論での説明の便宜のため、山本がつけたもの。なお、ページ数は英訳書のもの）。

- 1 「ロシアの歴史的発展の主要な特徴は、その発展が比較的に原始的で緩慢であることだといふことができる」(P. 37)。
- 2 「ロシアの社会生活は、より貧弱でより原始的な経済的土台のうえにうちたてられている」(P. 37)。
- 3 「マルクス主義は、生産力の発展が社会的・歴史的過程を規定する、と教えている。経済的団体や諸階級、諸身分の形成は、この生産力の発展が一定の水準に達したときのみ可能である。……社会的発展にかなうこれらの基礎的諸命題は、すでにアダム・スミスによって明確に定式化されていた」(Pp. 37—38)。
- 4 「ノヴゴロド王朝期は、その自然的・歴史的諸条件（より不利な地理的位置、稀薄な人口）によってもたらされた経済的発展の緩慢なペースが、必然的に階級形成の過程を妨げ、それによりいっそう原始的な性格をあたえた」(P. 38)。
- 5 「ある一定の内部的な経済的土台の上にうちたてられたロシアの社会的生活は、ずっとその外部的な社会的・歴史的環境の影響または圧迫のもとにおかれた」(P. 38)。
- 6 「この社会のおよび国家的組織が、その形成の過程で他の近隣の諸組織と衝突したばあいには、その一方の経済的諸関係の原始性とは方の比較的高度な発展とは、つづいておこる過程において決定的な役割を演じた」(P. 38)。

7 「ロシア国家は、原始的な經濟的基礎の上に成長し、より高度・強固な基礎の上にきずかれた他の諸国家組織と関係をもつにいたり、そしてそれを衝突した。ロシア国家はそれらとの闘争で屈服させられ……………ず、崩壊せずに、外部からの經濟的諸力の脅威的な圧力のもとで成長を開始した」(p.38)。

8 「主要な問題は、ロシアが四囲を敵にとりかこまれていたということにあったのではない。このことひとつではその状況を説明できない」(p.38)。

9 「後に旧ロシアに騎兵や歩兵の形成を強いたのは、タタール人ではなく、リトワニアやポーランド、スウェーデン等の圧力であった」(p.39)。

10 「西ヨーロッパの側からのこの圧力の結果として、ロシア国家は剰余生産物の異常に大きな部分を飲みこみ……………形成されつつあった特権階級を犠牲にして生存し、……………緩慢だった發展をさらに妨げ、人口増加と生産力の發展を妨げ……………、農民の「必要生産物」につかみかかり、その生計をうばい……………土地から逃亡するようにさせ、……………諸身分の分化を妨げ、……………原始的な生産的基礎を破壊してしまった」(p.39)。

11 「しかし、存在し、機能するためには……………、国家は諸身分の階級的組織を必要とし、……………一方では諸身分の發展のための經濟的基礎を破壊しながら、同時にこの基礎を政府の施策で發展させようと努力した」(p.39)。

12 「中世の身分制的君主制は、やがて官僚制的絶対主義に成長していくのだが、それは、ある特定の社会的な利益や関係を強化することによって、国家形態を構成していた。しかし、この国家形態自身は一度發生し存在するようになれば、それ自身の利害(王朝的な、宮廷的な、官僚的な……………)をもち、より下層の身分の利害とのみならず、より上層の身分のそれとも衝突するようになる。支配的身分は、……………国家に圧力をかけ、……………国家権力は、上層諸身分の野望にたいして抵抗を發展させ、かれらを自らに従属させようとした。国家と諸身分との関係の現実の歴史は、諸勢力の相互関係によって決定された合成的な線にそって進展した。

根本において同一の過程が、ロシアにおいて生じた」(pp.39—40)。

13 「国家は、發展しつつある經濟的諸集団を利用し、それを自分の限定された財政的・軍事的利益に従わせようとつとめ、支配的な經濟的諸集団は、……………その優越した地位を身分的特権の形で確立するために国家を利用しようと極力つとめた。……………その結果は、ヨーロッパの歴史に見られるよりも国家権力にとってより有利に展開した」(p.40)。

「諸身分は、国家の行為や法律で創りだすことはできない。……国家権力は、そのあらゆる方策によって、より高度の経済的諸關係を生みだしつつある基礎的經濟過程を援助することができただけである。……社会的分化がいつそう進んでいる西ヨーロッパの環境の影響と圧力をうけて、……ロシア国家が原始的な経済的基礎の上で、社会的分化の發展を強制することに力をつくさなければならなかったのは当然であった」(pp. 40—41)。

「ある一定の時期から——とくに十七世紀の終りくらい——国家は全力をあげて、その自然的な経済的發展を加速させようと力をつくしてきた。手工業や機械、工場、大工業、資本、等々の新しい部門が、自然的な経済の幹にいわば人為的に接木された。……資本主義は国家の所産であるように思われた」(p. 41)。

「より優越した武装力をもつ敵意ある諸国の真中で生きのびうるためには、ロシアは、工場を建て、航海学校を組織し、防備にかんする教科書を出版する、等々のことをしなければならなかった。……自然経済から貨幣・商品経済へと自然に發展しつつある国民経済は、その發展に照応した政府の方策にたいしてのみ……反応を示した。ロシアの工業、通貨組織および国家信用の歴史が、上述の主張にとって最善の可能な証拠である」(p. 42)。

「大部分の産業部門(金屬、精糖、石油、醸造、そして織物工業さえも)は、政府の施策の直接の影響のもとで創設され、ときどき莫大な政府補助金を与えられさえした」と、メンデレーエフ教授は書いている。……彼は、政府の政策が産業的諸力を發展させるためのなんらかの関心によって命令されたのではなく、純粹に財政的な、そして一部分は軍事的・技術的な考慮によって命令されたのだということをつくくわえるのを忘れている。それゆえにこそ、保護政策は、産業發展のための根本的な利益と対立したばかりでなく、種々の実業家グループの私的利益とさえもしばしば対立した」(pp. 42—43)。

「發展しつつあるブルジョア社会が西ヨーロッパの政治制度の必要を感じはじめたとき、専制政府はすでに西ヨーロッパ諸国のいっさいの物質的諸力で武装しおえていた。……中央集権化された官僚機構……電信……鉄道……絶対主義が自由にしうる軍勢は巨大なもの……革命前のフランス政府のみならず、一八四八年の政府でさえ、今日のロシア軍に類似したものはなにひとつ知らなかった」(p. 43)。

「財政的および軍事的機構によって国民を極度に搾取する一方、政府は、年々の予算を二〇億ルーヴリという巨額にまで引きあげた。その軍勢と予算とによって支持された専制政府は、ヨーロッパの株式取引所をば自身の国庫としたのであり、こうしてロシアの納税者はヨーロッパ株式取引所への絶望的な貢納者となった」(p. 43)。

20

「絶対君主制の金融的および軍事的な力は、……ロシアの自由主義をも圧倒しそして盲目にしたのであって、この自由主義は、公然と力をくらへることによって絶対主義と勝敗を決するという可能性にたいして、まったく自信を失ってしまつた。絶対主義の軍事的および金融的な力は、ロシア革命にたいして、どんな機会であれ、これを排除しているように見え」(p.44)。

21

「しかし、実際には事態はまったく逆であることがわかつた。

政府が中央集権化されればされるほど、そして社会から独立すればするほど、それはますます急速に、社会のはるか上に立っている一つの専制組織になつてくる。……二〇億ルーヴリの予算と八〇億ルーヴリの負債と武装した幾百万の軍隊とをそなえた中央集権化された国家は、社会的發展のもつとも基礎的な必要——国内統治の必要のみならず、それがそもそもその維持のために組織された軍事的保障の必要さえも——をみたすことをやめてのちも、なおひさしく存在しつづけることができた」(p.44)。

22

「こうした事態がよりながくだらなかつづけばつづくほど、經濟的および文化的發展の必要と、その強力な十億倍の慣性を發展させてきた政府の政策とのあいだの矛盾はよりいっそう大きくなつた。「偉大なつぎはぎ細工的改革」……の時期が過ぎさつたあとでは、政府が自発的に議會主義の道をとることは、よりいっそう困難になり、心理的によりいっそう不可能になつた。……これらの矛盾からぬけだす唯一の道は、絶対主義のボイラーの中に十分な水蒸氣をためこんで、それを爆發させることであつた」(p.44)。

23

「こうして、社会の發展にもかかわらず、絶対主義は、その行政的、軍事的および金融的力によって、存在しつづけているが、これらの諸力は、自由主義者の主張するように、革命の可能性を排除しなかつたばかりでなく、その逆に、革命をばそれから脱出する唯一の道にした。そのうえ、この革命は、絶対主義の巨大な力がそれ自身と国民との間に深淵を掘るのに比例して、なおいっそう急進的な性格を保証されていた。ロシアのマルクス主義が、この發展の方向をひとり解明し、その一般の形態を予言したことを正当に誇りうるが、他方、自由主義者たちは、もつともユートピア的な「現実主義」で自分を満足させており、そして革命的「ナロードニキ」は幻想と奇蹟にたいする信仰のうちに生活してゐた」(pp.44—45)。

24

「先行する社会的發展全体は、革命を不可避にした。では、この革命の力は何んであつたか？」(p.45)。

文脈を誤りなくとらえる必要上、やむをえず長文の引用が多くなり、そのために簡単にとりまとめることがむづかしくなったようであるが、しかし、ここに摘記した引用を通読すれば、およそつぎのようなことが、誰の目にも明らかである。

一、最初に、「ロシアの歴史的發展が原始的で緩慢」、「ロシアの社会生活は貧弱で原始的な経済的土台の上にある」という、「マルクス主義的」命題がおかれているが、これらはすべて、7の「ロシア国家」の「特性」を説明するための前ぶれとしてしか意味をもたず、それ以後は消え失せてしまっている。

二、3において、トロツキーは、自分の「マルクス主義者」ぶりを示すために、ことさら、「マルクス主義は、生産力の發展が社会的・歴史的過程を規定する、と教えている」と書き立てて、「諸階級、諸身分の形成」が生産力の一定水準への發展、分業の發展によって規定されると述べている。だが、あとになって「諸階級、諸身分の形成」の問題はまったく出てこないのだから、この3をふくむパラグラフ全体は、要するに銜学的なさわり、にすぎないということになる。おまけに、「社会的發展に坎んするこれらの基礎的命題がとくくの昔にアダム・スミスによってりっぱに定式化されていた」と書きたて、スミスが唯物史觀の基本命題をすでに「定式化」していると宣言されては、せつかくの「マルクス主義の教示」も型なしである。このようにスミスを唯物史觀の発見者に仕立てているところに、わがバラライキンの括弧つき「マルクス主義者」の実体が的確に示されているといつてよい。

三、トロツキーが右の唯物史觀を定式化した命題をわけわからずに引用していることは、あとの説明によって明瞭に裏書きされている。もっとも肝腎の国家の問題の説明においては、「諸階級、諸身分」とはまったくかわりのない、それこそまさにぬえのような「国家」ばかりが出てくる。たとえば、4で「ノヴゴロド王朝期は、経済的發展の緩慢

なベースが、必然的に階級形成の過程を妨げた」とあるが、「ノヴゴロド王朝」はすでに形成されおえている一定の諸階級の存在を前提し、特定の階級の支配形態としての「国家形態」ではないのか？ いったい、「ノヴゴロド王朝」は、どんな身分とも階級とも結びつきのない、まさに宙に浮いた王朝であるのか？ 11では、「国家は、存在し機能するために、諸身分の階層的組織を必要とし……」と述べられているが、国家がまず存在して機能するために諸身分の階層的組織が必要となるというのであるから、諸身分の階層的組織がまだ存在しないうちにはやくも国家がさきに存在しているということになる。「諸階級、諸身分」の欠けているところに「国家」、つまり「階級国家」が生まれるというわけである！ おまけにこの「諸階級、諸身分」となんのかかわりもない「国家」は、「諸身分の發展——（どういう發展？——山本）——のための経済的基礎を破壊したり、同じ基礎を發展させるべく努力した」りという、世にも珍らしい活躍ぶりを演じてみせるのである！ さらにまた、12において、「官僚制的絶対主義は、ある特定の社会的利益や関係を強化することによって国家形態を構成していた」というのも、混乱と曲解の一極致を示している。「官僚制的絶対主義」そのものが、すでにりっぱな「国家形態」である。だから右の文章は、「官僚制的絶対主義という国家形態が、国家形態を構成していた」という、みごとにトウトロギーにすぎない。また、「ある特定の社会的利益や関係」などという、不正確で混乱した言葉をつかって体裁をとりつくりつつあるが、正確には、「ある特定の階級の社会的利益」というべきところである。ところで、「官僚制的絶対主義」という「国家形態」そのものがすでに「ある特定の階級もしくは身分の利益と支配関係を強化する」ためのものであり、そのためにのみ存在しているのであるから、右の文章は、正確に表現しなすと、「ある特定の階級の利益と支配関係を維持・強化するための国家形態である官僚制的絶対主義は、ある特定の社会的利益や関係を強化することによって、国家形態を構成していた」となる。これはまた、なんと超傑作のトウトロギーではあるまいか。

右によって、トロツキーには、国家についてのマルクス主義的把握など全然無縁のものであることは、明白である。

しかも、この超階級的な国家なるものが、最後まで「主役」を演ずることになり、その「ボイラー」の中に十分な水蒸気をためこんで、一気に爆発させられる」というまさに劇的な最期をとげさせられることになっているのである！

四、10から以下24までを通じて、ありとあらゆる種類の矛盾、筋ちがい、飛躍、たわごと、術学的空文句がいたるところに出てくるが、これらのがらくたをいっさい無視することによって文脈をたどれば、その主たる論旨は、およそつぎのようなものだという見当がえられる。

まず、「西ヨーロッパの先進諸強国の脅威的圧力のもとにおかれた原始的・後進的なロシア国家は、これに対抗して生きのびるために、一方で手工業や機械、工場、大工業、資本、等々の新しい産業部門⁽¹⁴⁾をつぎつぎとおこし、他方では、中央集権化された官僚機構を強化するとともに、電信、鉄道を全国にひろげ、巨大な軍事機構⁽¹⁵⁾・軍事力をつくりだした。」——「そのために、財政的負担が巨額になり、ロシア国家は絶対君主制は、国民を極度に搾取し、さらにヨーロッパの株式取引所を通じて巨額の負債を背負い、そのための必要経費の増大が、さらに国民の上に重くのしかかることになった。」——「ここにおいてもはやロシア国家は、国内統治の必要も軍事的保障の必要さえもみだすことができなくなり、社会的発展のもつとも基礎的な必要をみたしえないにもかかわらず、強力な十億倍の慣性⁽¹⁶⁾」で、この国家は生きながらえることになる。」——「ここにいたっては、「つぎはぎ細工的改革」ではとうてい間に合わず、また、ブルジョア議会議会主義の道をとることも望みなくなった。経済的および文化的発展の必要と、十億倍の慣性を発展させてきた絶対主義⁽¹⁷⁾・国家の政策との矛盾は、もはや革命よりほかに解決しうる道はない。唯一の道は、絶対主義のボイラーのなかに十分な水蒸気をつめこんで、それを爆発させることである。」⁽¹⁸⁾

(14) この「手工業や機械、工場、大工業、資本、等々の新しい産業部門」という言葉の並べ方をちょっとみていただきたい(15)のうちにある)。まず、ロシア国家が「手工業」という産業部門⁽¹⁹⁾をおこしたなどという文章がまったくの空文句であること

ぐらい、すこしでも經濟學を学んだことのあるものならば、すぐわかる。手工業は資本主義（トロツキーのいうところのブルジョア社会）よりずっと以前からひきつづきあったもので、いまさら興しようもないのである。つぎに、「機械、工場、大工業」という並べ方も、絶妙である。こんな並べ方のできる者は、まともな考え方のできないキ印だということを表明しているようなものである。ところが、それにさらに輪をかけて、なんとどんじりにひかえているのは、「資本」である！

こんなことを書くような男が、マルクス主義はおろか、經濟學のケの字も知らないものだということを、誰かうたがうものがあるうか。

（148）この世紀的な珍品、「絶対主義のボイラー」のなかに十分な水蒸気をつめこんで、それを爆発させる」をどうかとくち味わっていただきたい。レーニンは一九一七年にいたるまで、トロツキーの書いたものを批判するときは必ずといってよいほど、「トゥーシノの渡り者」とならべて、いつでも、「大言壮語の達人、空文句の羅列屋」といった評語を書きこえることにしているが、この「ボイラー」のひとくだりを読むと、なるほど、レーニンはみごとにトロツキーの本質を明確に言いあてているものだと、感嘆させられずにはいない。しかも、この「ボイラーの爆発」をもって、苛烈な階級闘争の頂点たる革命を言いくるめてしまおうとするあたりは、まったく堂に入った詐欺師的政治屋というのほかない。

ここに要約されたところをよくごらんいただきたい。これが、トロツキー自身名づけた「ロシアの歴史的発展の諸特性」のすべてであり、また彼が自伝の『わが生涯』のなかで得意になって書いている「ロシア社会史の研究」の精粹である。おそらくどんな読者でも、マルクス主義文献について初歩的知識をもっているひとならば、これを読んでそれがマルクス主義的分析だと考えるものは、ひとりもないであろう。というのは、こんな説明など、ブルジョア歴史家がいくらでもつくりだせるような、お粗末な歴史物語でしかないということが、すぐわかるからである。実際、これほどひどい革命のとらえ方は、多少ともましなブルジョア歴史学者ならば誰でも、とうてい考えられないような代物である。

まず第一に、革命とは、トロツキーの説にしたがえば、階級と階級との闘争、より厳密にいえば、支配階級にたい

する被抑圧階級の決定的闘争などではなく、「国家と社会的発展との衝突」なのである。ここには敵対する諸階級の間の革命闘争というものは、みじんもみられない。いや、それどころか、そもそもはつきりとその経済的・社会的地位を規定された階級そのものが、ほとんどまったく出てこないのである。身分とか階級とかいった、抽象的な言葉はさかんにつかわれているが、特定の、敵対関係のなかで規定された階級は、「農民」をのぞいては、まったく姿を現わさない。その、やっとひとつ顔を出している農民についても、その説明は、どうであろうか？「国家は、農民の「必要生産物」につかみかかり、彼らから生計をうばい、その上で定住する暇を与えずに土地から逃亡するようにさせた」——これがそのすべてである。そして、「衝突」とか「矛盾」とか「ボイラー」とかが問題になる肝腎の局面にさしかかると、もはやこの「農民」は永久に姿を消してどこかへ行ってしまうのである。いったい、「農民」は土地からただでなく、ロシア国内からよそにのこらず「逃亡」してしまったのか？「農民が土地から逃亡する」という事態がおこれば、

この「農民」の搾取と収奪に依存している地主層と農村ブルジョアジーは、どうやって生きていくのか？また、「土地から逃亡す」れば、当然都市に移っていかなければならないが、では、そこでこれらの「農民」全部は、どうやって生きていくのか、プロレタリアに転化したのではないか？——こういう当然の問題をとっくの昔に忘れてしまい、気の毒な「農民」をことごとく舞台から「消してしまふ」とは、また、なんとあきれはてた「マルクス主義」者であろうか！だが、「農民」は、ちらと姿を一度見せているから、まだましである。プロレタリアートにいたっては、姿を見せるどころか、影も形もあらわれず、おしまいとなっている。各章の表題を一見することによって、真の主役はプロレタリアートでなければならないという見当はおよそつけられるが、それは、つぎの「二都市と資本」の章にはいつて、突如としてその姿を現わすことになっているのである。その辺のところは、おそらく、文学青年くずれのパ

ライキンの浅知恵から出たこととおもわれるが、そもそも肝腎の「ロシアの歴史的発展の諸特性」のなかに影も形も見えないようでは、この説明の正体は、下手で空っぽの「文学的歴史記述」ということにならざるをえない。では、ブルジョアジーはどうか？ といえ、これまたまったく姿を見せない。ただし、それに近い、思わせぶりの「文学的」表現は、いろいろと出はきているのである。たとえば、「発展しつつある経済的諸集団」（13）とか、「支配的な経済的諸集団」（13）とか、さては、「社会的上層身分」（13）とか、「上層階級」（14のあるパラグラフ）とか、「特権階級」（10、ただし、この「特権階級」は、「ロシア国家がこれを犠牲にして生存し」とあって、「犠牲にされてしまった」もののである！）とか、「実業家グループ」（17）とか、等々。しかし、ブルジョア階級（ブルジョアジー）という言葉がひとつも用いられていないこと、「身分」とか「集団」とか、およそ階級からかけはなれた用語がたえまなく出てくるという、たったひとつの事実がすでに、階級的分析の能力はおろか、その分析視点すら、トロツキーにはまったく欠落しているという、端的に示しているのである。

ところが、見られるように、他方では、「機械、工場、大工業、資本」（15）とか、「ロシアの工業」（16）とか、「電信、鉄道」（18）とか、さては、「発展しつつあるブルジョア社会」（18）とかいったような用語が、これまた無雑作にならべられているのである。それゆえ、トロツキーによれば、資本家階級も賃銀労働者階級もまったく存在しない「機械、工場、大工業、資本、電信、鉄道」があるのであり、ブルジョアジーもプロレタリアートもない「発展しつつあるブルジョア社会」がらっぱに在るというわけである！

さらにまた、ここで注意をひくのは、「ロシアの自由主義」と「自由主義者」についての、トロツキーの説明の仕方である。20では、「絶対君主制の金融的および軍事的な力が、ロシアの自由主義を圧倒し盲目にし、自由主義は、公然と力をくらべ

ることによって絶対主義と勝敗を決するという可能性にたいして、まったく自信を失ってしまった」とあり、21では、「自由主義者たちは、もっともユートピア的な「現実主義」で自己を満足させていた」と述べられている。つまり、「ロシアの自由主義者」は、「専制の金融的・軍事的力に圧倒され盲目になり、公然と力比べて専制と勝敗を決することがむづかしいというので、自信をなくし、ユートピア的な「現実主義」で自己満足し、専制とは力比べて争うことをやめた」というわけである。「ロシアの自由主義者」とは、いうまでもなく、自由主義的ブルジョアジーのことである。トロツキーが右のように「ロシアの自由主義的ブルジョアジーが、専制に圧倒され盲目になり自信をなくし、空想的な「現実主義」で自己満足することにおわっていた」と書いているのは、一九〇六年のことであり、「自己満足していた」とされる時期は、一九〇五年革命勃発の直前のこととされている。

だが、われわれは、本論稿のなかでレーニンの活動、とくにメンシェヴィキにたいする徹底した闘争をあとづけてきたときに、レーニンが、自由主義的ブルジョアジー（ブルジョア民主主義派、もしくは自由主義的民主主義派）をどのように特徴づけ、これとどのようにたたかたかということと、とくと知らされている。自由主義的ブルジョアジーこそは、ロシア革命における指導権をめぐる革命的プロレタリアートとたたかた当の相手であり、不徹底な変革、民主主義革命の流産のために、つまり専制との妥協により制限選挙制憲法にもとづく立憲君主制への改革を目指し、革命的プロレタリアートを裏切るべく執拗な闘争をつづけ、そのために、れっきとした機関紙『オスヴォボジデーニエ』を発行し、独自の政治綱領をつくりあげたものであって、その理論的指導者は、すでにわれわれにおなじみのペ・ベ・ストルツェ氏そのひとである。このストルツェの名前を聞いただけで、読者諸君は、新イスクラ派「メンシェヴィキ」の面々が自由主義的ブルジョアジーとどんなに不徹底な闘争を、というよりむしろ徹底した押れ合いをや

っているかということが、レーニンにより系統的に暴露され、追求され、批判されたことを、憶い出されるはずである。たとえば、本論稿の（七）において、レーニンの論文『ゼムストヴォ・カンパニアと「イスクラ」の計画』について検討したとき、レーニンがボリシェヴィキ党の任務として「自由主義的ブルジョアジーの不決断と中途半端性を革命的に批判することに重点をおくこと」を明示したこと、これにたいして、新イスクラ派・メンシエヴィキの「大計画の中味」は、もっぱらブルジョア自由主義派にたいする「働きかけ」を主眼とし、ゼムストヴォ議会で声明書を読みあげ、反政府的ブルジョアジー・自由主義派と「協定」を結び、ゼムストヴォ議会で労働者が「平和的な」演説をし、同じく議会の建物の周囲に「平和的な」デモンストレーションを集中するというものであったこと、この「新計画」・新「戦術的任務」を鳴物入りで世界中に吹聴することによって、ほかならぬ自由主義派の親方・ストルーヴェから「経済主義者の見解を正當に擁護しているもの」として絶大の支持と賞讃を勝ちえたのが、まさにわが「編集局のバラライキン」ことトロツキーそのひとであったということ、正確に知ることができたのである。また、つきさに、レーニンの名著『民主主義革命における社会民主党の二つの戦術』の内容を吟味したときにも、とくにその「一二　ブルジョアジーが民主主義革命から尻ごみすれば、民主主義革命の展開力はよまるか？」のなかで、レーニンが、

「われわれマルクス主義者はみな、ブルジョアジーの革命に賛成する態度が不徹底で、利己的で、臆病なものだということ、これを理論のうえから知っているし、またわが自由主義者やゼムストヴォ議員やオスヴォボジデーニエ派の実例で毎日、毎時観察している。ブルジョアジーは、その狭い利己的な利益が満足されるやいなや、徹底した民主主義から「尻ごみする」やいなや（しかも彼らはいまもうそれから尻ごみしつつある！）かならず、その大部分は反革命のが

わに、専制のがわに寝がえって、革命に反対し、人民に反対するであらう。」(前出、八〇―八二ページ、傍点レーニン)(註)

と述べ、新イスクラ派・メンシェヴィキが「ブルジョアジーが革命の事業から尻ごみすると、それによって革命の展開力がよわまる」と称して、プロレタリアートの民主主義的諸任務をブルジョアの穩健の水準に、つまりそれをこえると「ブルジョアジーが尻ごみする」限界に、引きさげるべきだと主張しているのにたいして、これは、プロレタリアートの民主主義的革命闘争をブルジョアジーとの掛引にすりかえてしまひ、原則を裏切り、革命を裏切ることによつて彼らブルジョアジーの自発的同意(「尻ごみしない」という)をあがなうものであり、革命におけるプロレタリアートの指導権を自由主義的ブルジョアジーの指導におきかえるもの、民主主義革命におけるプロレタリアートの利益を売り渡すものである、と断固たる批判の鉄槌をくだしていることを、つぶさに知ることができたものである。

(149) 本誌第二十七卷第一号、八七ページ、参照。

これらの、レーニンの一貫した、明白な主張は、つぎつぎと出された数々の著書、論文のなかで、くりかえしくりかえし詳細かつ徹底的に展開されているのであつて、それらの内容は、レーニンによつて率いられたボリシェヴィキの活動家は言うに及ばず、レーニンの仮借ない批判によつてその正体をあばかれた当の新イスクラ派・メンシェヴィキの面々はいずれも、先刻御承知のはずである。とりわけ、これらのレーニンの著作を通じてスター的地位をあたえられた新『イスクラ』の「編集局のバラライキン」ことトロツキーには、レーニンの明確な主張と批判は、すべて胆に銘じて記憶されているはずである。そのうえ、ただたんに文字の上で議論の余地なく明確に示されているばかりでなく、ロシア革命運動の實際の進展の過程において、すべての動かしがたい事實によつても、自由主義的ブルジョアジーと新イスクラ派・メンシェヴィキがレーニンの指摘したとおりに、「実践」活動をして実績をあげたことが、誰

の目にも——およそ物を見る目をもっているほどの者ならばだれでも——はっきりと映っているのである。

ところが、どうであろう、一九〇六年、ロシア第一次革命のもっとも高揚した時期に、とくに「ロシア社会史の研究」にもとづいてと称して、「革命の結果と展望」を論じたトロツキーのこの著書のなかでの、自由主義的ブルジョアジーについての記述の中味はといえば、レーニンによって明示されたところとひとつとして共通なものはない、似通ったところすらない。いや、似ているところか、レーニンの明確な教示と動かしがたい歴史的事実とをふみにじり、抹殺して、これとまったくちがった、根も葉もない、つくりごとをもつてきて、いっさいをごまかしているのである。自由主義的ブルジョアジーについて並べたてているもつともらしい説明は、ひとつのこらず、事実を反するたわごとである。「ロシアの自由主義者は、専制に圧倒され盲目になった」？ とんでもない、専制は「野蛮ながむしやらぶりを發揮しただけで、内乱の巨大な進展、君主主義者の冒險失敗による絶体絶命の状態によって、事実上解体しはじめ、生きながらくさっていく寄生物の正体をあらわしはじめて」いたのだ。事態の急速な進展によって「圧倒され盲目になり、自信をなくした」のは、自由主義者ではなく、まさに専制なのである。「公然と力を比べて専制と勝敗を決する」？ じょうだんではない。彼らは、はじめから「専制と勝敗を決する」などと大それたことを考えてみたことはない。彼らは、反動的な小細工を弄し、専制と取引をし、革命をつぶそうとしか考えないのだ。「ユートピア的な「現実主義」で自分を満足させた」？ であらめいいかげんにするがいい。ユートピアなど、徹底した利己主義と小商人根性の権化である彼らに、なんのかかわりがあるうか。彼らほど、計算づくで現実的な政治商売を追求したものはなく、どんなにしても革命を裏切り、専制との取引をうまくやってのけようとけんめいになったものはないのだ。こんなたわごとやで、まかせを言つて、よくもまあ口が曲らないものだ。やはり、大言壮語と空文句だけしか能のない煽動政治屋の口

は、尋常一様なものではない。

以上、「一 ロシアの歴史的発展の諸特性」の簡単な検討によって、著者トロツキーが、社会的分析の意味を知らず、唯物史観についての一片の知識すらなく、社会の歴史的発展を分析する能力は完全に欠けており、とくに革命とか階級闘争とかいうような、当面もつとも肝腎な事柄についてのマルクス主義的知識はみじんもなく、あるものは俗物的観念ばかりで、ロシア革命における主要な階級諸勢力を分析することはおろか、ブルジョアジーもプロレタリアートも農民も、その名称すらほとんどまったく現われないままに「ボイラーを爆発させる」などといった「革命的」たわごとでけりにしていることが、すべて明らかとなった。種々の用語についてのたあらめな解釈と使い方、論理的矛盾と飛躍はここでのきわだった一「特性」であるが、もつとも重大な「特性」は、結局、彼の所論のうちにはマルクス主義はひとかけらもみとめられないこと、全文ことごとく反マルクス主義的俗物観念論でつらぬかれているということである。レーニンがくりかえしくりかえし懇切丁寧に教示した革命にかんするマルクス主義の基本的原則をことごとくふみにじり、いぜんとして新イスクラ派・メンシェヴィキに同調する主張を執拗にくりかえしながら、しかも、自分自身をマルクス主義者としておしだし、ロシアのマルクス主義者がひとり正しかつたとかすぐれていたとか見えすいたすりかえを終始やってのけているという、この厚顔無恥、悪辣さには、ただただあきれるばかりである。これらの諸「特性」をはやくも「一」で教えられたわれわれは、「二」以下でどんな議論が出てくるか、はたしてそこにマルクス主義的分析の名に値する論究が見いだされるかいなかにについても、「二」以下の各節の表題をみただけで、大体の予想がえられるようにおもわれる。とはいえ、この狡智にたけたバラライキンが、どんな論法で、その「高名」を馳せた「永続革命論」なるものを、「根拠づけ」ようとしているかははっきりとつきとめるためには、や

はり「二」以下についてちいっとした吟味をくわえる必要がある。そのさい、ロシア第一次革命の評価についてのみならず、ロシアにおける資本主義の發展および階級分析についてのレーニンのマルクス主義的把握とつきあわせることによって、真のマルクス主義理論と反マルクス主義理論との相違を正確につかむことができ、本論稿の主題である「トロツキズム」の性格規定についての決定的な材料を手に入れることもできるものと期待されるのである。

三十三

「二 都市と資本」では、まず、最近十年間における近代的都市の急速な成長、貧弱な農村・都市手工業に対立しての大規模工場制工業による都市人口の集積、都市人口の中核としての賃銀労働者階級が説かれ、つぎのように叙述は展開される。以下にその抜粋をかかげよう。

1 「工場制工業組織は、プロレタリアートを最前線に押し出すばかりでなく、ブルジョア民主主義の基盤を足下から切り捨てる。以前の諸革命においては、ブルジョア民主主義は、都市小ブルジョア、つまり手工業者や小商店主等々にその支持を見出していたのである。

ロシア・プロレタリアートが不釣合いに大きな政治的役割をはたしたもう一つの理由は、ロシアの資本がかなりの程度まで外国にその起源をもっているという事実である。この事實は、カウツキーによれば、ブルジョア自由主義の成長とは不釣合いに大きなプロレタリアートの数と強さと影響力との成長をもたらしした。

……ロシアにおける資本主義は手工業組織から發展したのではなかった。それは、その背後に全ヨーロッパの經濟的文化をもち、その前方に直接的な競争者として絶望的な農村手工業やおちぶれた都市手工業者を置いて、ロシアを征服したのであり、そして、それは、なかば乞食化した農民を労働力の貯水池としてもっていた。絶対主義は、種々の方法で田舎を資本主義の足かせにしつづけるのを助けた」(p.49)。

2 「重税によって農民をプロレタリア化させ、貧困化させつつ、絶対主義は、ヨーロッパ株式取引所のたくさんの金を軍隊や軍艦に、監獄や鉄道にかえた。……国民生産の巨大な分前が利子の形で外国へ送られ、ヨーロッパの金融貴族を富ませ強化した。最近十年間に議會制国家における政治的影響力を不断に強化し、商業資本家や産業資本家を背景におしやったヨーロッパの金融ブルジョアジーは、ツァー政府を、事実その家臣に変えた」(p. 49—50)。

3 「その支払がロシア国家予算の相当部分を食いつくしたところの貨幣そのものが、国内の手のつけられていない自然的富や、とくに、いかなる反抗を示すことにも全然慣れていない未組織の労働力やによってひきよせられた商業・産業資本の形で、ロシア国内に向った。最近の一八九三—一九九年の産業ブームの時期はまた、ヨーロッパ資本の流入強化の時期でもあった。かくしてロシアにおいて労働者階級を動員したのは、大部分いままおヨーロッパのものであり、フランスやベルギーの議會で政治権力を実現した資本であつた。

ヨーロッパ資本は、このおくれた国を経済的に従属させ……。しかし、その経済的支配の道程においてぶつかった障害物がすくなくればすくないほど、その政治的役割もまたより小さいということがわかつた」(p. 56. 傍点—トロツキー)。

4 「資本は、絶対主義の直接の協力によつて西ヨーロッパから侵入し、短期間のうちに旧都市を商業および産業の中心地につくりかえ、さらに、短時日のうちにかつてはまったく人の住んでいなかった土地に商業的・工業的都市を創りだしさえした。この資本は、しばしば非人格的な巨大な株式会社の姿をとつてあらわれた。一八九三—一九〇二年の産業ブームの十年間に、全株式資本の合計は二〇億ルーヴリ増加した。……プロレタリアートはじきに集積されて巨大な無産階級となつたが、一方、この無産階級と絶対主義との中間には、数の上ではひじょうに少なく、「人民」からは孤立し、なかば外国のものであり、歴史的伝統ももたず、ただ獲物にたいする貪欲さによつてのみ鼓舞された資本家ブルジョアジーが立つていたのである」(p. 51)。

ここに示されたのが、「二 都市と農村」の内容のすべてである。例によつて様々の夾雑物が真意をつかみにくいものになっているが、これらのものを整理すれば、ここでの主張の大筋はつぎのようなものだということがわかる。

一、ロシアの資本主義は、国内の手工業組織から発展したものではなく、また、国内の大規模な資本主義的工業を

発展させたのは、国内資本ではなく、むしろ主として西欧資本である。

二、西欧資本は、一方で、ロシアの公債引受によって莫大な利子を年々まきあげ、まず、農村で、「直接的な競争者」として、絶望的な農村手工業者」をほろぼし、「なかば乞食化した農民を労働力の貯水池」とした。これにたいして、専制は、農民を西欧資本への貢納者にし、重税でその「プロレタリア化と貧困化」をおしすすめ、「種々の方法で田舎を資本主義の足かせにしぼりつけるのを助ける」ことで、西欧資本に協力し、また、それ自身「その家臣に変えられた」。

三、西欧資本は、都市では、同じく「専制の直接の協力によって」、「商業・産業資本の形で」ロシア国内に大挙侵入し、「一八九三—一九〇二年」という「短期間に旧都市を商業および産業の中心地につくりかえ、さらにもっと短い期間に新興の商業的・工業的都市を創りだした」。これらの都市は、右の西欧資本による「大規模な工場制工業の成長から生まれた」。西欧資本は、「国内の未開発の自然的富」を手に入れ、「どんな反抗を示すことにもまったく慣れていない未組織の労働力」の搾取をめざして、「ロシア労働者階級を広範に動員し」、そのほとんどを都市に投入した。これにたいし、「直接の競争者であった、おちぶれた都市手工業」は、ますます零落し、「近代都市の人口の中核は、賃銀労働者の階級」で占められるにいたった。

四、したがって、ロシアにある主な階級は、つぎのものだけとなる。つまり、農村には「絶望的な農村手工業者となかば乞食化した農民」がいて、その後者が都市工場制工業への「労働力の貯水池」となっている。都市には、「おちぶれた都市手工業者と小商店主」とプロレタリアートだけで、そのほかに、「絶対主義」と「ひじょうに人数が少なく、半ば外国のものである資本家ブルジョアジー」がいる。

五、右のような「階級構成」によって、ロシアの「革命の力」〔一〕の（24）は、必然的につぎのように規定される

ことになる。すなわち、「人民」を構成する三つの階級——「都市と農村の手工業者」、「農民」およびプロレタリアート——のうち、前二者は「おちぶれて、絶望的で、半ば乞食化し」てみな「重要な意味をもたない」ものになり、有力なのはプロレタリアートだけである。都市工場制工業により「都市手工業者（と小商店主）」が圧倒され没落しつつあることは、「ブルジョア民主主義」を支えるものの没落を、したがって、「ブルジョア民主主義の基盤」が「足下から切り捨てられる」ことを意味する。プロレタリアートは、「流入した莫大な西欧資本」のおかげで「大きな数と強さと影響力の成長」をかね、⁽¹⁵⁰⁾「最前線に押し出さ」れ、「不釣合いに大きな政治的役割を果たす」ことになる。もっともみじめなのは、「人数もきわめて少なく、人民から見離されて孤立しており、西欧資本によってひきまわされ、歴史的伝統もたず、ただ獲物にたいする貪欲さだけでハッスルしていた」「資本家ブルジョアジー」であって、これは、「無産階級、つまり、プロレタリアート」と絶対主義との中間に立っている」だけである。「絶対主義」は、その「巨大な行政的、軍事的および金融的力によって」「（一）の23」せつせと「農民」を搾りあげては貢税を西欧資本へまわすと同時に、同じ「農民」を「労働力」として西欧資本の経営する都市工場制工業へたえず供給し、こうして西欧資本への涙ぐましいばかりの献身と協力につくしている、というわけである。

(150) ところが、西欧資本は、ロシアの「いかなる反抗を示すことにも全然慣れていない未組織の労働力」によってひきつけられて入ってきた(3)と、トロツキーは書いている。すでに本論稿の(四)でみたように、「南ロシア労働者同盟」(オデッサ)と「北ロシア労働者同盟」(ペテルブルグ)によって革命的闘争の種子がまかれ、一八七〇年代から八〇年代にかけて労働運動が發展をとげ、数多くのストライキがたたかわれ、その頂点がオレホヴォ・ズーエヴォのモロゾフ工場の八千人参加の大ストライキであったことは周知のところである。この歴史的事実をぬりつぶして、ロシア労働者を「従順な未組織の労働力」だとし、西欧資本のおかげで(!!)、この「従順で未組織の労働力」がにわかに「最前線に押し出され」、「大きな政治的

役割を果すようになった」とされている。この矛盾撞著したつくりばなしが彼の社会的、歴史的分析の成果なのである！！

ところで、この説明をきいてまず第一に浮んでくる疑問は、「資本家ブルジョアジー」とは、いったい、なにか？ ということである。それは、「半ば外国のものであり、歴史的伝統をもたず」(half-foreign, without historical traditions) と述べられているが、彼のいう「商業＝産業資本としてロシアに入り、都市の工場制工業に投下された西欧の資本」と、どういう関係にあるのか？ いったい、都市工場制工業を経営する「資本家」は、「ロシアの資本家ブルジョアジー」であるのか、それとも、「西欧の資本家ブルジョアジー」であるのか？ この当然の疑問は、すぐさまトロツキーによる「階級構成」にかんする説明の全体についてつぎつぎと新たな疑問をひきおこさないではおかぬ。それらの疑問のうちでもっとも基本的なものは、トロツキーの「ロシアにおける資本主義は、手工業組織から発展したのではなかった」という主張にかなするものである。彼は、この主張を基本として、そこから、西欧資本が「商業＝産業資本の形でロシア国内に入り、工場制工業をおこし、近代的城市をつくりだし、この国を経済的に従属させた」と述べ、ここから一連の「力関係」をひきだしてくるのであるが、では、「ロシア国内の資本」はどうなっているか？ については、ひとつもこたえていない。こうして結局、もっとも基本的な、緊急に説明が要請されている問題は、「ロシアにおける資本主義の発展」を、事実に即して、理論的・歴史的にたたくとらえるということに帰着するのであって、ここに大きく浮びあがってくるのは、いうまでもなく、レーニンの不朽の名著『ロシアにおける資本主義の発展』である。トロツキーも、その「自伝」のなかでこの著書を「はしからはしまで (from cover to cover) 研究した」と明記しているのであるから、レーニンのこの名著をもって、「ロシアにおける資本主義の発展」にかんするもっとも信頼すべき証人、とすることに、彼もおそらく異存はないであらう。

(15) 本誌第二十五卷第三号、一二八ページ、参照。

まず、工業からみていこう。

著書『ロシアにおける資本主義の発展』(以下『発展』と略記)において、「工業における資本主義の発展」を解明しているのは、第五章「工業における資本主義の最初の諸段階」、第六章「資本主義的マニファクチュアと資本主義的家内労働」および第七章「機械制大工業の発展」である。レーニンは、第五章でまず、農村手工業と結合している「小営業」(мелкий промысел)の成長をとりあげ、農村手工業は「けつして農業から分離されることはなく、田舎に農業の補助的職業として残存した」(トロツキー『結果と展望』, *ibid.* p. 48)もので手工業者は「商品生産者」としては認められないとか、「小農民の営業と大工業とのあいだにはある深刻な敵対関係がある。両者は直接に競争相手である」とか唱えるナロードニキの「伝説」を「まったく成り立たない」ものとして簡単に片づけ、農民改革後のロシアで「資本主義発展の第一歩をあらわしている小営業」が、二通りの仕方で急速に成長してきたことをあとづけ、「農耕農民の分解は必然的に農民的小営業の成長によって補われなければならないこと」、「現物経済の衰微につれて、いろいろな原料加工はつぎつぎに特殊な産業部門に転化していった」こと、そして、「農民ブルジョア」と農村プロレタリアトとの形成は、農民的小営業の生産物にたいする需要を増大し、それと同時に、これらの営業のための自由な働き手と自由な金とを提供した」ことを、このうえもなく明確に検証している(全集第四版、第三巻、二九六ページ、傍点—山本)。ついで第六章では、その「二 ロシアの工業における資本主義的マニファクチュア」において、「織物業」以下各重要な産業諸部門でマニファクチュアがいかに大きな役割を果しつつあるかが詳細に検証されているが、さらに第七章では、大工業の発展にかんする歴史的・統計的資料がきわめて精確に分析され、その「八 大工業の分布」

のなかで、重要な問題として「工場制工業の個々の中心地への生産の集積の問題と、工場中心地の種々の型の問題」がとりあげられ、これにたいして決定的な資料として第一〇三表「ヨーロッパ・ロシアにおける工場制工業のもっとも重要な中心地」が示され、ここにつぎのような説明があたえられている。

(132) この個所に、レーニンはつぎのような注記を加えている。

「營業の資本化」を論じているニコライ——オン氏の基本的な理論的誤りは、彼が商品生産と継起的諸段階にある資本主義との最初の歩みを無視している点である。ニコライ——オン氏は、「人民的生産」から「資本主義」にじかに飛躍している。そうしてにおいて、彼の目にする資本主義は基盤のないもの、人為的なもの、等々だといって、おかしいほどまでの素朴さでおどろいている」(前出、二九六ページ、傍点——山本)。

この注記を一読すれば、トロツキーの主張はナロードニキの謬論をそっくりそのまま真似たものだということがすぐわかる。両者の間のただひとつの相違は、ナロードニキが「人民的生産」に力をいれたのにたいして、トロツキーは、「人民的生産」をば「絶望的」とか「おちぶれた」ものとかいつてすげなく見放してしまい、もっぱら「都市工場制工業」に力をいれたことにある。つまり、前者は「農民」を主役にして「プロレタリアート」を無視したが、後者は、「都市プロレタリアート」だけを主役に仕立てて「農民」はきれいさっぱり無視してしまったのである。とはいえ、これによって、トロツキーがナロードニキの出来の悪い亜流であることに変わりはない。

「この表は、ロシアにおける工場中心地の三つの主要な型を、われわれに示している。すなわち、(一) 都市。これは第一位にあつて、労働者と企業経営の最大の集積を特徴としている。この点では、大都市がとくにぬきんでている。……二つの首都「モスクワとペテルブルグ」……リガ……イヴァノヴォヴォズネセンスク……ポゴロドスク……その他の都市……」。

中心地の第二の型は、モスクワ県、ヴラチーミル県およびコストロマ県にとくに多い工場村である。これらの中心地の首位にあるのは、オレホヴォ・ズーエヴォ町である。この町は、労働者数の点では二つの首都におとっているだ

けである。さきに述べた三つの県、ならびにヤロスラヴリ県とトヴェーリ県では、農村の工場中心地の大多数を形成しているのは最大級の繊維工場（綿紡績―綿織、亜麻布織、毛織、およびその他の工場）である。……

工場中心地の第三の型は、「クスターリ」村であり、ここでは最大級の企業経営が「工場」としてかぞえられることもまれではない。われわれの表のなかでは、パヴロヴォ村、ヴォルスマ村、ボゴロドスコエ村、ドゥボフカ村がそのような中心地の見本となっている。……」（前出、四五五―四五六ページ、ゴシツク体―山本）。

そして、第一〇三表にかかげられている「工業制工業のもっとも重要な中心地」の合計一〇三（一八九〇年現在）の内訳は、都市（および郊外地）四〇、農村（村落および町）は六三となっている。

さらに、農業について述べている第四章「商業的農業の成長」のなかでも、その「七 農産物の工業的加工」において、農民改革後のロシアにおける工業加工の農業生産のきわめて急速な発展が、火酒の醸造、甜菜糖の生産、じゃがいも澱粉の生産、搾油生産について詳細に検証され、この面で農村における資本主義の発展が急速かつ確実に進んでおり、農村ブルジョアジーと農村プロレタリアートへの分化がさらにいっそう進展しつつあることが論証されている。

以上、『発展』のなかから工業にかなする説明部分を若干とりだしてみただけで、ロシアの工業は、「都市手工業・農村手工業と都市工場制工業」だけだとするトロツキーの説明が、どんなに事実からかけはなれたでたらめであるかは、うたがう余地がない。

では、農村については、どうか？

「絶望的な農村手工業者と半ば乞食化した農民」だけだとするトロツキーの説明がどんなにあくどいうそっぱちであるかは、誰にでも容易に察知できる。「絶望的な手工業」どころか、ロシア農村の広い範囲にわたってりっぱな工業企業

および商業的經營が急速に増加しつつあることは、さきにあげた「七 農産物の工業的加工」のなかでも、同じ第七章のうちの商業的穀物經營および商業的畜産・酪農業の項のなかでも、あますところなく的確に検証されている。とりわけ、第二章「農民層の分解」の最後の節、「二三 第二章からの結論」を一読すれば、トロツキーが書き立てているような、「半ば食化した農民」とか「絶望的な農村手工業者」とかいった「古い農民層」は、まったく新しい二つの型の農村住民、すなわち農村ブルジョアと農村プロレタリアートによって駆逐されてその姿を消しつつあることが、動かしがたい資料によって精確に論証されていることがわかる。こうした農業における「農民層の分解」と「資本主義的生産の發展」という、もっとも初歩的・基本的な事柄に思いをいたすだけで、トロツキーの農村民にかんする説明がまったくおどろくべき虚構、支離滅裂なたわごとにすぎないことは明白である。

さらに、主題の都市と資本について、実情を簡単にみてみよう。

レーニンは、『發展』の第七章「機械制大工業の發展」の最後におかれた「一二 ロシアの工業における資本主義の三段階」の冒頭で、

「さて、わが国の工業における資本主義の發展にかんする資料がもたらす基本的な結論を総括しよう。」（前出、四七五ページ、傍点―山本）

と述べ、つぎのような精確な説明をあたえている。

「この發展の主要な段階は、三つある。すなわち、小商品生産（小規模な、主として農民的な營業）、資本主義的マニファクチュア、工場（機械制大工業）である。もろもろの事實は、「工場制工業」と「クスターリ」工業とはまったくつながりがないという、わが国でひろまっている見解を、完全に論破している。それどころか、この二つを分

離することは、純粹に人為的である。われわれが示した、もろもろの工業形態の関連と継承性とは、きわめて直接的であり、またきわめて密接である。また、もろもろの事実は、小商品生産の基本的傾向が、資本主義の發展に、ことにマニユファクチュアの形成にあり、そしてマニユファクチュアはわれわれの目の前でひじょうに急速に機械制大工業へと成長転化していることを、まったく明白に示している。おそらく、もろもろの継起的な工業形態のあいだの、密接で直接的な結びつきのもっともきわだった現われの一つとして役立つものは、一連の大工場主や最大級の工場主たち自身が、かつては小営業者のうちでも小営業者であつて、「人民的生産」から「資本主義」までのすべての段階をとつてきたのだ、という事実であろう。サツヴァ・モロゾフは、農奴的農民であり（一八二〇年に身代金をはらつて自由になつた）、牧夫であり、御者であり、機械労働者であり、機械クスターリであつて、自分の商品を買占むに売るためにモスクワまで歩いてでかけたものだが、その後は小企業經營の——前貸問屋の——工場の、所有者となつたのである。彼は一八六二年に死んだが、そのころは、彼とそなたくさんの息子たちは、二つの大きな工場をもつていた。一八九〇年には、彼の子孫の所有に属する四つの工場には、三九、〇〇〇人の労働者がやとわれていて、三五〇〇万ルーヴルの製品を生産していた。ウラチミル県の機械業では、一連の大工場主たちが、機械労働者や機械クスターリから成りあがつた。イヴァノヴォ・ヴォズネSENSKの最大級の工場主たち（イヴァーエフ家、フォーキン家、ズブコフ家、コクシキン家、ポプロフ家、その他多数）は、クスターリの出身であつた。モスクワ県の錦欄工場は、すべてクスターリの機小屋であつた。……」（前出、四七五—四七六ページ）。

レーニンには、まだこのあとに、クスターリ、労働者または小商人から成り上つた大工場主を多数あげているが、ここに示されている動かしがたい諸事実は、さきにあげられた的確な資料とあいまって、「都市と資本」にかんするト

ロツキ一の説明が、まったく根も葉もない錯乱したたわごと以外にはなにひとつまともなものはふくんでいないことを、うたがう余地なく実証しているのである。

なお最後に、ロシアの「階級構成」について、トロツキ一の説明の前代未聞の荒唐無稽ぶりを玩味していただくために、レーニンが『発展』のなかで綿密に論究している「階級構成」の分析の結果を、簡単につきにあげておこう。第七章「機械制大工業の発展」の「五 資本主義的大企業における労働者数は増加しているか？」のなかで、レーニンは、「第二版への補遺」として、一八九七年国勢調査における総人口の職業統計を加工してつくった種々の分類表をかかげているが、そのうちから「階級構成」にかんする「概略的規定」の部分をつぎに引用してみよう（以下にかかげるのは、レーニンがつくった表および説明の文章を、見やすいようにまとめたものである）。

総人口 一二五・六（百万）

農業人口 九七・〇

上層＝富裕な小経営主（分与地をもつ雇農や日雇、および一般賃銀労働者を、相当数搾取する）

一九・四

中層＝きわめて貧しい小経営主（豊年のときだけ収支つくぐなう、生活の主な源泉は外見上「自立的」な小経営）

二九・一

下層＝プロレタリア的および半プロレタリア的住民層（財産をもたず、主として、または半ば労働力の販売

によって生活するもの）

四八・五

商工業人口 二一・七

大ブルジョアジー

一・五

富裕な小経営主

二・二

極貧の小経営主

四・八

プロレタリアおよび半プロレタリア

一三・二

非生産的人口

六・九

大ブルジョアジーすべての金利生活者、地主、ブルジョア・インテリゲンツィ

アの一部および高等文武官

一・五

富裕な小経営主大部分の使用人、経営管理者、ブルジョア・インテリゲンツィア

一・五

極貧の小経営主下級文武官吏、多数の使用人

一・九

プロレタリアおよび半プロレタリア

二・〇

(153) 農業人口総数のうち「地主」の数はまったくとるにたりないうえに、その大部分は、金利生活者、官吏、高級官吏等々にいれられている」と、レーニン述べている。(前出、四四〇ページ、傍点―山本)。

総人口の階級別構成(『発展』の第九八表)

大ブルジョアジー、地主、高級官吏、その他

約 三・〇

富裕な小経営主

〃 二三・一

極貧の小経営主

〃 三五・八

プロレタリアおよび半プロレタリア

〃 六三・七

合計

〃 一二五・六

(154) ここに、レーニンは、「彼らは二、二〇〇万以下ではない」と注記している。

経済と政治との関連の問題(十二)

一四七

レーニンによってここに明確に示されているロシアの階級構成の現実の実態と、トロツキーが書きたてている観念的「構成」——「絶望的な農村手工業者」、「半ば乞食化した農民」、「おちぶれた都市手工業者」、「半ば外国のものである資本家ブルジョアジー」および「都市工場制工業プロレタリアート」がそのすべてである！——とを、どうかよく見くらべていただきたい。トロツキーは、レーニンの『ロシアにおける資本主義の発展』を「はしからはしまで研究した」と、自分で書いている。また、マルクスの『資本論』を第二巻まで勉強した、とも言っている。この「結果と展望」の「序文」では、「マルクスの弟子であるわれわれ」と大書され、「われわれがマルクス主義理論を正確に適用したということを示す論駁しがい証拠」と誇らしげに書かれている。

それゆえ、『資本論』を勉強し、『発展』をはしからはしまで研究しつくした、マルクスの弟子」が、「マルクス主義理論を正確に適用して、ロシア社会史の研究、ロシア革命の原動力についての社会的・歴史的分析」をおこなってみると、「絶望的な農村手工業者」、「半ば乞食化した農民」、「おちぶれた都市手工業者」、「半ば外国のものである資本家ブルジョアジー」と「都市プロレタリアート」だけという、この世にありもしない幽霊人口が姿を現わしてくる、というわけである。この一幕をみただけで、読者は、これまで本論稿のなかでトロツキーそのひとにあたえられたさまざまな「性格規定」がまったく正鵠をえたものであることを確信されるであらう。『資本論』も読まず『発展』も勉強しなかった男が、『資本論』を勉強し『発展』をはしからはしまで研究したと「自伝」に書き、『発展』の内容とまったくちがった、むしろそれをさんざんにふみにじった「分析」を大々的に売り出している。社会的・歴史的分析などはまったくおこなわず、文学青年くずれの観念的妄想で綴った駄文をロシア社会史の研究だと宣伝してまわる。レーニンによって的確に「ばかばかしくも左翼的」迷論として一蹴されたこの妄想の産物、「永続革命」論

をば——まんまとせしめたボリシェヴィキ党の指導的地位をかさにきて——真のマルクス主義理論として広範な勤労大衆にむりやり呑みこませる。——こういった人物に、煽動政治家などという言葉は、まだまだ分に過ぎてゐる。どんなう、そでもたわごとでも平気で言える男、どんな下劣な裏切りでもやってのけ、どんな卑劣な陰謀でもあくことなくめぐらして、自分の権勢を高めようと必死のあがきをつづける男、マルクス主義のマの字も知らず、俗物的觀念と文学青年くずれの妄想ででつちあげた数々の迷論をマルクス主義理論として売り出す、厚かましさと破廉恥の権化、——世界史において「革命家」といわれるほどの人間の中で、これほど下劣で陰險、惡辣な俗物野心家、脳中からうほの大言壯語屋があつたろうか。とはいへ、世間には、このデマゴークの作り話「自伝」に感心したり、『結果と展望』を最大の傑作として売りひろめようと狂奔したりする手合もすくなくないのである。われわれは、なおこの著書の「三」以下についても、簡単な検討をくわえ、この惡辣きわまりない世紀的デマゴークの「才能」のほどを、いっそうよく捕捉することにしよう。

(一九七三・九・一四)